

8 下呂市馬瀬地域の民話

(8-1) 八百比丘尼

①話の内容

馬瀬の中切村に次郎兵衛が開いている酒屋がありました。ある朝、小さなひょうたんを持った小僧が入ってきました。小僧は、この小さなひょうたんに酒を一斗入れてくれと頼んできました。次郎兵衛は、絶対入るまいと思っていましたが、なんと入ってしまったのです。それから小僧は毎日酒を貰いにきました。次郎兵衛は一体何者だ、と思い、小僧の跡をつけてみました。すると、小僧の正体はなんと川の魚でした。小僧を捕まえて話を聞くと、川に中にある龍宮の祭りに酒が一斗必要だったために次郎兵衛の酒屋で酒を貰っていたことを明かしました。次郎兵衛は酒のお礼に龍宮の祭りに招待してもらいました。

三日ほど楽しく過ごして龍宮を去る時、乙姫が木箱をくださいました。その木箱は、「聞き耳の箱」といって、鳥や獣、虫の話をしている声が聞こえるという不思議な木箱。しかし、開けてしまうと、死ぬといわれました。

その後、次郎兵衛は旅へ出て行き、不思議な木箱は家に置いておきました。次郎兵衛にはかわいい娘がいました。娘が遊んでいるとその不思議な木箱を見つけてしまいました。開けてみるとそこには小さな人魚がいたのでした。娘はその人魚がどうしてもおいしく見えてしまって食べてしまいました。すると、旅に出ていた次郎兵衛は死に、娘は美しい馬瀬の里で八百年も生きたという話です。(『飛騨川 流域の文化と電力』ほか)

②取材調査

中切の林年宏さん(73歳)から話を聞いた。林さんの家は以前、商店(林屋)を営んでおり、酒を扱っていたことから、この話の舞台になった酒屋ではないかといわれている。「話に出てくる淵は、『湯が淵』といい、私が高校生の頃まではとても深い淵だった。水遊びをよくした場所で、大きい岩が二段になっていたから、二段目の所から飛び込んだり、休憩したりしていた。」

「しかし、昭和34年の伊勢湾台風の時に、深かった淵が埋まり、その後の河川改修によってかつての深い淵はなくなってしまった。その後、川に注ぐ谷の水が少なくなったり、道路の建設などによって現在のような姿に変わっていった。」

「うちが商店を営んだのは終戦後なので、昔話の酒屋ではなかった。以前は別の店があったのではないと思う。」



聞き取り調査(6月28日下呂市馬瀬)



現在も川遊びが行われる湯が淵
(8月10日)

小僧が潜った淵のすぐ脇にはバイパス道路ができ、かつてのような姿が見られなくなったが、今も子どもたちの水遊び場となっている。地名にも淵の名は残っており、湯が淵の南側は「淵尻垣内（フチジリガイト）」という地名だった。

本校職員の小池亜美さんに聞くと、馬瀬には多くの淵があり、「七里十里五十淵（しちりじゅっさとごじゅっぷち）」という言葉があるという。七里（約 28km）の間に十の集落があり、その中に多くの淵があることからそうよばれているようだ。



馬瀬川の南側から見た湯が淵
(6月28日下呂市馬瀬)



淵尻垣内（フチジリガイト）の表示
(6月28日)

③研究・考察

湯が淵の形状が大きく変わった伊勢湾台風は昭和 34 (1959) 年 9 月 26 日、東海地方全域に甚大な被害をもたらした。私たちが生まれるはるか以前の出来事だが、図書館の新聞資料でその被害状況を確認した。平成 23 (2011) 年の東日本大震災に匹敵するほどの大きな被害だったことを知った。益田川流域の被害状況は各市町村資料にも記録されている。

昭和三四年九月二六日、伊勢湾台風にともなう豪雨によって全村に大被害を受けた。村議会を 10 月 2 日に開き、次のことを決議した。

- ・被害が大で居住に堪えられなくなった…六戸に対して金一万円宛の見舞いを贈る。
- ・仮設住宅二戸を…割当ててる。
- ・応急家屋修理費二万円を…割り当ててる。

流木を所有者から寄附を受け、中洞区へ売却し、代金拾万円を前記外の被害者に見舞金として交附する。なおこの洪水時日和田学校の裏側の溝が増水校舎へ多量の水が侵入している。

- ・県からは全壊者に二、〇〇〇円、半壊者に一、〇〇〇円宛の見舞金が交附された。

(『高根村史』より一部改変)

伊勢湾台風（台風 15 号）昭和 34 年 9 月 26 日夜より近畿・中部・北陸を襲った超大型の台風で、飛騨地方も全般にわたって甚大な被害を受けた。県下の全壊家屋が 3 千数百戸に達したことによって近来稀れに見る台風であったことが想像される。

特にこの台風は多量の雨を伴い、降雨量は 25 日～26 日を通じて 200mm に達した。当時の被害を次に掲げる。(…次頁へ)

(…前頁より)

被害の状況 家屋 全壊1戸 半壊9戸 屋根その他破損40余戸 浸水1戸
農業 田 流失・埋没0.5ha 冠水10.0ha
畑 流失・埋没0.6ha 冠水6.0ha
桑園冠水8.2ha 耕地水路(頭首工)8カ所60m
土木 河川5カ所312m 道路5カ所133m
林業 炭窯14基 木炭倉庫1棟 作業道500m
治山 崩壊地15カ所
水道 町・大島両水道取水口土砂流入
農産物 4,350千円 小坂営林署管内に於ける立木・林業施設に甚大な被害があった。(『岐阜県小坂町誌』)

伊勢湾台風

昭和三四年(一九五九)九月二六日一八時三〇分和歌山県潮岬に上陸した十五号台風は三重県を経て、愛知・岐阜県を北上富山湾から日本海へぬけた最大風速七〇mの超大型台風で三重県下に未曾有の大災害をもたらした。特に伊勢湾は満潮と一致したため大高潮となり名古屋市外沿岸一体は有史以来の激甚災害となった。金山町附近通過は同日二二時より約一時間で強烈なる風雨は全町に大災害の爪跡をのこした。

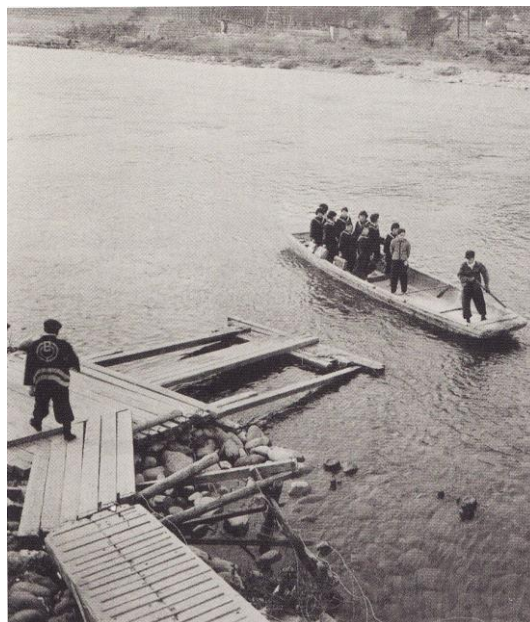
被害状況 全壊家屋二七戸 罹災者一二三人、半壊家屋一四二戸 罹災者六八一人、
浸水家屋六五戸 罹災者三一八人、非住家屋二八五戸

公共施設の被害状況 教育施設一〇カ所 公共建物五棟 道路決壊 一二カ所
橋梁損壊五カ所 農林施設四四カ所 被害総額一八六二二万円

この災害に対し岐阜県は金山町に災害救助法が発動された。(『金山町誌』)

益田川流域では昭和33(1958)年7月25日の集中豪雨による被害も甚大で、家屋・橋梁や農地の被害が大きく、伊勢湾台風とあわせて2年連続の水害となった。

馬瀬地域に関しては、昭和32(1957)・昭和33(1958)年の集中豪雨に続く被害であり、さらに翌昭和35(1960)年、昭和36(1961)年も水害に遭った。農業も不振で「満身創痍の有様」であったと記録されている。こうした歴史の中で護岸工事をはじめ益田川および支流の改修が求められるようになってきた。



昭和33年の集中豪雨により益田橋が流され、生徒たちは渡し船で登下校した。

(『益田高校創立80周年記念誌』)

(8-2) かいだん淵

①話の内容

むかし、桂林寺で「御回壇」が行われるたびに、村で見かけたことのない美しい御高祖(おこそ)頭巾の婦人が童女を連れてお参りするようになりました。

ある晩、村の男衆が二人の後を追いかけると、二人はこの淵に身を投げ、姿が消えてしまいました。この話を聞いた住職は、

「あの二人は、岩魚の精で、釣り上げられた淵の主の残された家族じゃ」と言われました。

二人がお参りをしていた辺りをみると、暈が濡れ、笹の葉が二枚残っていました。以来この淵では岩魚が釣れないようです。(『飛騨馬瀬村の昔話とうた』ほか)

②取材調査

かいだん淵は馬瀬数河にある深い淵だった。民話のようにイワナは釣れなくなったかもしれないが、アユはたくさん釣れるからか、辺りには多くの釣り客が竿を伸ばしていた。地域の方に聞くと「八百比丘尼」の「湯が淵」と同じようにかつてはもっと水量の多い深い淵だったということだった。



かいだん淵(8月22日下呂市馬瀬)



かいだん淵近くの鮎釣り(8月22日)

かいだん淵のすぐ近くには「法水観音」とよばれる湧き水がある。法水観音は、その昔、観音様が地元の人々の夢枕に立ち、湧き水の場所を教えてくれたというもの。それ以来、この地には常に絶えることなく水が流れ続けるようになったという。

取材に訪れた日、地元の方だけでなく、他県ナンバーの車に乗った人たちが水汲みをされていた。「この水は甘くて、お茶を淹れるとおいしい」という話を聞いた。



法水観音(8月22日下呂市馬瀬)

③研究・考察

かいだん淵近くの橋を渡ってすぐのところに江戸時代に建立された桂林寺がある。淵の名にある「かいだん」は「回壇」といい、飛騨地域の真宗大谷派（東本願寺）寺院の行事である。飛騨の真宗大谷派の中心である高山別院照蓮寺の輪番が三ヶ月ほどかけて飛騨地域の真宗大谷派のすべての寺院を回って布教活動と門徒へのお礼を述べる。

桂林寺住職の日野修文さんに聞いたところ、益田地域は毎年6月末から回壇が行われており、今年桂林寺では7月19日に行われた。以前は輪番の人がすべての寺院を回ったらしいが、現在は分担をして各寺院を回っている。回壇の日には桂林時の門徒がお参りされるそうである。



桂林寺（8月22日下呂市馬瀬）



高山別院照蓮寺（2013年8月18日）

馬瀬川の水は金山町に入り、岩屋ダムに貯められる。岩屋ダムは美濃地方や愛知県の水がめとして大切な役割を持っている。しかし、馬瀬から金山にかけて生活していた集落の人々はダム建設によって去っていった。これら地域の民話は史料としてわずかに残っているだけである。



金山町乙原地域から見る岩屋ダム
（7月25日下呂市金山町）